

「変な外人」が社会を動かす？

弘末雅士

東南アジアは、タイを除き、欧米の植民地支配を経験した。この地域の歴史研究に携わってきた筆者は、植民地支配への対抗原理の構築に、ヨーロッパ人が関わったことを最近再考している。かつて検討した北スマトラの宗教運動をはじめ、インドネシア民族意識の形成過程にも、類似した現象が見られるように思われるからである。反植民地主義運動や民族主義運動に関しては、外来思想と地元の価値観を接合した二重言語者の役割や現地語出版物の重要性が、指摘されてきた。ところで、そうした運動の成立期をみると、リーダーが出会った外来者やその思想が、少なからぬ影響を与えたことに改めて気づかされる。筆者がこのことに関心を抱いたのは、一九世紀終わりに北スマトラ内陸部でバタック人が起こした宗教運動を検討した時だった。それまで比較的安定的な社会を形成していたバタック人は、一九世紀後半になるとキリスト教の布教活動、プランテーション企業の進出、オランダ植民地支配の開始により、大きな社会変容を体験した。これに対し、バタック人の間からも反抗が生じた。しかし、それらはすべてオランダの軍事力の前に敗退した。従来の首長のもとでの緩やかな統治に代わり、オランダ人官僚や植民地首長が植民地体制を構築し、労役や税制を持ち込んだ。それに対し、人々は不満を感じつつも、植

「変な外人」が社会を動かす？（弘末）

民地体制をもたらした力が、強力であることは否定できなかった。

そうしたなかで、トバ・バタック人（トバ湖周辺のバタック人の最大方言集団）の呪術師グル・ソマラインが、一八九〇年にエホバから啓示を受けたと唱え、新たな宗教運動を始めた。それによると、ある日、夢で彼の魂が、イエスによってエホバのもとに導かれ、この神よりバタック人の伝統的道德律を保持するよう、説かれたという。キリスト教の神に、バタックの価値観を維持したまま到達したと、彼は唱えたのである。

こうしてエホバの啓示を受けた彼に自信を授けたのが、一八九〇〜一八九一年にバタック地域を旅したイタリア人旅行家モディリアニとの出会いであった。モディリアニは、ヨーロッパ人に未だよく知られていない地域を紹介する、イタリア地理学協会の会員であった。バタック人にとってモディリアニは、オランダ人ともキリスト教の宣教師やプランターとも異なる目的を持った、ヨーロッパ人であった。彼は、一八九〇年一〇月にバタック地域に入ったが、オランダ人の監督官は安全を保障できないため、この地域の踏査を認可しなかった。東インド（インドネシア）全域での調査許可書を東インド総督から得ていた彼は、監督官のやり方についてそう不満を募らせた。

そこでモディリアニは、オランダ人に知られないように、こっそり旅行しようと考えた。そのため、この地域で顔の利くソマラインにガイド役を依頼することにした。彼がソマラインにこのことを頼んだ時、ソマラインはモディリアニを黙って長いこと見つめた。そのあとで彼は、「ロム（ルム）王は、オランダを打ち払うために貴方様を遣わされた。私も貴方様のお手伝いをします」と、モディリアニを抱きしめ、口づけをして答えたという（Elio Modigliani, *Fra i Batacchi indipendenti, Rome, 1992, p.85*）。「ロム（ルム）王」とは、モディリアニがバタック人に彼の王の名を尋ねられ、ローマ法王を意識して答え

た名称である。ソマラインの回答は、単なる誤解が導いたものではない。彼は、モデイリアニの表情のなかに、オランダ人への不満を見取ったのである。ヨーロッパ人でありながら、オランダ人に不満を有する人物、それこそは、ヨーロッパ人の力の源エホバに至ったソマラインが、捜していた存在であった。モデイリアニはソマラインと一緒に一ヶ月ほど旅をした。そのうち彼は、オランダを打ち払うことなく、バタックの地を去った。しかし、ソマラインはこうしたヨーロッパ人が現れたこと自体に満足し、自らの教義に自信を深めた。彼はこの後、熱心に教えを説き、トバ湖周辺の人々の間で信者を獲得した。信者たちは、労役や税の義務を拒否し、いざとなるとロム（ルム）王が現れ、自分たちを助けてくれると唱えた。植民地支配への対抗原理が構築されたのである。

以上はバタックの事例であるが、インドネシア民族意識の形成期にも、ヨーロッパ人が同様の役割を担った。その一例は、「民族覚醒の母」とされるカルティニ（一八七九―一九〇四年）に見られる。ジャワ人貴族の家に生まれた彼女は、ヨーロッパ人小学校でオランダ語教育を受けた。その後の婚前閉居の時期も、オランダ語の小説を読むことをとおして、ジャワ人の位置を模索した。富永泰代氏の研究によると、その過程で、ムルタトゥーリの『マックス・ハーフェラー』（一八六〇年）やクーペルスの『静かな力』（一九〇〇年）が、大きな影響を与えた。

前者の著者（本名ダウエス・デッケル）は、オランダ人官僚として十数年間東インドに赴任し、一八五六年からは西ジャワのルバックの副理事官となった。その経験を活かし、当時実施されていた強制栽培制度下のオランダ人官僚や現地人首長の腐敗・癒着・都合主義を、『マックス・ハーフェラー』で告発した。また『静かな力』は、一八七〇年代、一八九九―一九〇〇年に東インドに滞在したオランダ人クーペルスの作品である。ジャワ人は目に見えぬ存在の力も信奉しており、眼に見える事物だけ

「変な外人」が社会を動かす? (弘末)

か信じようとしないヨーロッパ人の合理主義は、ジャワ文化に屈することを、オランダ人理事官の家族を舞台にして小説で描いた。両者とも、オランダ人の間で反響を呼んだ。

こうしたオランダ人作家による、ジャワ人民衆を苦しめたオランダ人を告発したり、ジャワ文化がヨーロッパ文化より優れているとした小説が、カルティニにジャワ人としての誇りを自覚させた。こうした作品との出会いがなければ彼女は、ジャワ人が植民地体制下でオランダ人と対等に扱われるべき存在であるという認識に至らなかったであろう。

この両作家とも、オランダ人のなかでは変わり者である。ダウエス・デッケルは、強制栽培に従事するジャワ農民の過酷さと植民地官僚の腐敗を、オランダ東インド総督に訴えたが、聞き容れられず、植民地官僚を辞職し、小説家に転職した。また大多数のオランダ人が、東インドにヨーロッパ文明を導入しようとした一九世紀末から二〇世紀初頭に、「東洋の神秘」がオランダ人を変えてしまうと説いたクーパーも、変人である。だが、こうした「変人」が、ジャワ人やインドネシア人に少なからぬ影響を与えたことは否定できない。

類似した事例は、オランダ人社会主義者とインドネシア人との出会いにも見られる。一九一四年中部ジャワの新興都市スマランに、オランダ人社会主義者スネーフリートやバールスらが、東インド社会民主主義協会 (Indische Sociaal Democratische Vereeniging) を設立した。協会は、鉄道や港湾の労働組合運動を指導しつつ、現地人に社会主義思想を広めようとした。インドネシア人にとってヨーロッパ人社会主義者は、階級闘争をとおして、資本主義に支えられたヨーロッパ人の植民地体制の解体を説く興味深い存在であった。協会の会員となったインドネシア人の多くは、ムスリムだった。当時のムスリムは、社会主義の理念が既にイスラームに含まれており、ムハンマドはそれを体現した存在とみなす

者が少なくなかった。

一九一七年のロシア革命の成功は、社会主義者の活動を活性化させた。彼らは、植民地軍の間で紅衛兵運動を展開しようとした。オランダは、こうした運動に厳しい姿勢で臨み、主要なヨーロッパ人リーダーを東インドから追放した。そのため指導権は、若きインドネシア人の手に移り、一九二〇年に党名を現地語のマレー語で *Perserikatan Komunis di India* 「東インド共産主義者同盟」のちにインドネシア共産党となる」と変更した。アジアで最初の共産党であった。党は、オランダ植民地支配からの解放と、東インド（インドネシア）の独立を掲げた。以降インドネシア人が、民族主義運動の主役を担うことになった。

オランダ人社会主義者は「変人」でないかもしれないが、現地人に対抗原理を形成させるきっかけになったことは、上の場合と同様である。インドネシア人自身が社会主義運動を構築することも、可能であったろう。それでも初期の段階では、植民地体制への不満を正当化してくれるヨーロッパ人が、彼らにとつて頼もしかったことは言うまでもない。ちなみにスネーフリートは、東インドを追放された後、中国で第一次国共合作に尽力した。

こうした現象は、反植民地主義運動だけに限らない。今日でもいろいろな場面で、起こりうることである。日本以外の地域に関心を持ち、その地の人々と接触を試みる日本人は、当該地域の人々に、「変な外人」あるいは「変な日本人」と思われるかもしれない。しかし、そうした多様な人々との出会いが、ヒントとなり、社会を変える動きを誘発することもある。人の出会いは、実に不思議である。外来者との交流が、文化摩擦を生む一方で、抱えている矛盾解決のための糸口を授けることにもなるのである。

（本学名誉教授）